

福岡市の水道が始まって100年、 これからの100年も安全で良質な水道水を…

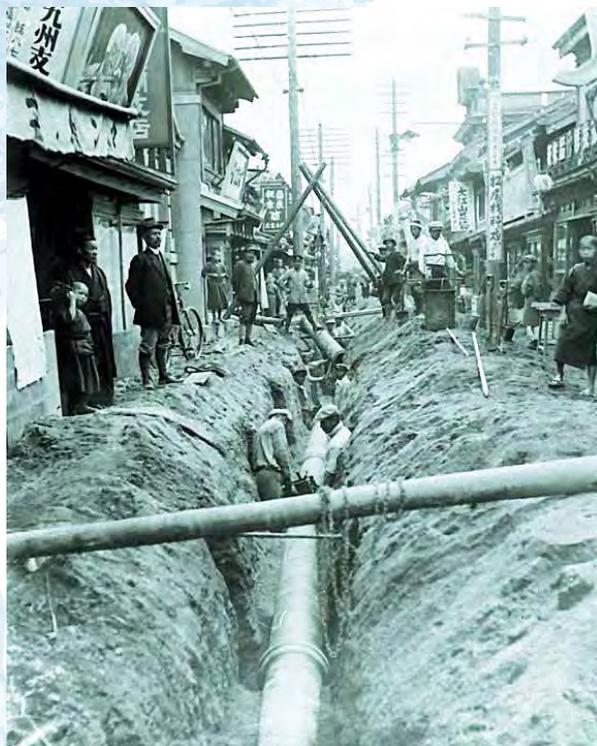
大正12(1923)年に曲渕ダムや平尾浄水場(現・福岡市植物園)などの一連の施設が完成し、給水を開始した福岡市の水道事業は、令和5(2023)年3月1日に創設100周年を迎えます。

これからの100年も、市民の暮らしと都市の成長を支える安全で良質な水道水を供給し続けていきます。

未来へ、つなぐ。



ANNIVERSARY
福岡市水道100周年



昭和6(1931)年頃の配水管の布設工事
(現在の博多区下川端町～網場町付近)

100周年記念ロゴマークとキャッチコピーについて

★キャッチコピー

「未来へ、つなぐ。」というキャッチコピーは、これまで数多くの困難を克服してきた先人たちの努力と、苦難を共に乗り越え一緒に歩んできた市民の皆さまや、水源地域・流域の方々に感謝し、これからも安全で良質な水道水を供給し続けていくという決意を示しています。

★ロゴマーク

100という文字は、「雨や川などの自然のめぐみの水」「そこから集まって暮らしの中を巡る水」「緑をはじめとする環境と共にある水」を色で表し、形を変えて巡り続ける水の循環と、未来に向けて持続可能な水道を構築する使命を胸に、水のバトンをつなぐ意思を表しています。

CONTENT / 目次

- ・ごあいさつ 福岡市長 高島 宗一郎..... 2
- ・現在の水道事業..... 3
- ・100年のあゆみ..... 5
- ・水源地域・流域への「感謝」..... 11
- ・これからの100年に向けて..... 13



水道創設以前、博多の風物詩であった
荷車で売り歩かれていた井戸の水



ごあいさつ

福岡市長

高島 宗一郎

福岡市は、古くからアジアとの交流の中で発展してきた都市であり、現在、人口は160万人を超え、人口増加数・率ともに政令指定都市で1位、企業の立地や創業も進んでいます。また、水道や交通をはじめ商業・文化施設などの充実した都市機能に加え、歴史や文化の魅力、豊かな自然環境は、住みやすいまちとして国内外から高く評価をいただいています。

これまで都市の成長と市民の生活を支えてきた重要なライフラインである福岡市の水道事業は、市制が始まった明治22(1889)年に最初の計画調査が実施されましたが、実現を見ることなく、その後、都市の成長による必要性から、大正12(1923)年3月1日に創設されました。創設当初の給水人口は約3万5千人でしたが、人口の増加や都市の急成長、生活様式の変化に合わせて事業規模を拡大し、現在は、創設当初の46倍に当たる160万人の市民に水道水を提供しています。

他方で、福岡市は政令指定都市で唯一市域内に一級河川を有していないなど、水資源に恵まれていないことから、他都市では例のない19回にも及ぶ水源開発を重ね、近郊での水資源開発はもとより、市域外である筑後川からの導水や国内最大規模の海水淡水化施設の建設などにより水源の確保に努めてきました。今日の福岡市の発展があるのも、先達の弛まぬご尽力、そして、水源地域・流域の皆さまや国・県をはじめとする関係団体の皆さまなど、多くの関係者の方々の多大なるご支援とご協力によるものであり、改めて深く感謝申し上げます。

また、この間、福岡市では、異常少雨により、昭和53(1978)年と平成6(1994)年の2度、大渇水を経験しましたが、この経験を糧に、現在のSDGsの理念にもつながる「節水型都市づくり」を進め、世界トップの低い漏水率を達成するなど、限りある水資源の有効利用に積極的に取り組んできました。それらを通じて培った水道技術は国際的にも高い評価を受けており、世界の国々で水の有効利用が進むよう海外への技術協力にも積極的に取り組んでいます。

福岡市の水道事業は、令和5(2023)年3月に創設100周年を迎えますが、市民生活と都市の成長を支えるという水道事業が果たす重要な役割は、今後も変わることはありません。ポストコロナの新しい時代が始まり、Well-beingなど新しい価値観が生まれ、少子高齢化や災害の激甚化・頻発化がますます顕著となるなど、水道事業を取り巻く環境は大きく変化していますが、2度の渇水を「節水型都市づくり」に活かしたように、ピンチをチャンスに変える「したたかさ」と変化を恐れない「たくましさ」で、ICT技術の積極的な活用や脱炭素社会の実現に向けた様々な取組みにもチャレンジするなど、今後とも、市民生活の向上に寄与していけるよう、持続可能な水道事業の構築に向け、しっかりと取り組んでまいります。

今後とも、福岡市の水道事業へのより一層のご理解とご協力をお願いいたします。